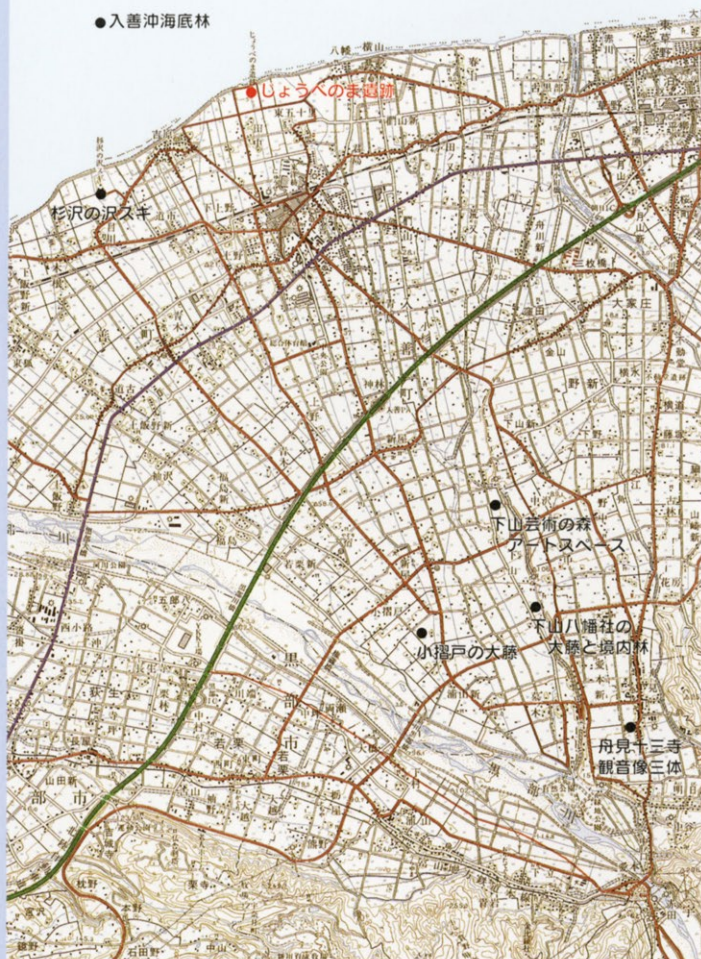


入 善 町

国指定史跡

じょうべのま遺跡



「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平13北復、第216号」

入善町教育委員会事務局
文化係

〒939-0693 富山県下新川郡入善町入膳3255

TEL 0765-72-1100 FAX 0765-74-2790

<http://www.town.nyuzen.toyama.jp>

E-mail kyoikuiinkai@town.nyuzen.lg.jp



歴史がある、
回マンがある

平安時代前期の建物10数棟、 それは東大寺の荘園跡か？

じょうべのま遺跡は国指定史跡

田中地区から土器や規則正しく並んだ木杭などが耕作中に発見されたのは、昭和16年頃にさかのぼります。昭和45年になると、田中地区一帯で圃場整備が行われることになり、それに先だって発掘調査が実施されました。

以後、現在まで17回にわたり調査が実施されて、大きな成果をあげています。

じょうべのま遺跡の年代は、平安時代の前期及び鎌倉時代の前期の二期に分かれます。

平安時代の前期に属する掘立柱の建物は、10数棟も検出されています。正面に主屋、その左右に脇屋が建てられるなど「コ」の字型の配置がなされており、さらに、5回以上の建て替えがなされています。また、柱穴などからたくさんの遺物が出土しています。

それらは、須恵器、土師器、硯、緑釉・灰釉陶器、製塩土器、土錐、木簡、下駄などです。特に、須恵器や土師器の底に「田中」や「西庄」という文字が書かれた墨書土器と「丈部吉椎丸上白米五斗」などと書かれた木簡が注目されます。これらの出土遺物や建物の配置から、じょうべのま遺跡は、荘園の荘所跡ではないかと推定されており、東大寺領丈部庄に比定する説が有力になっています。

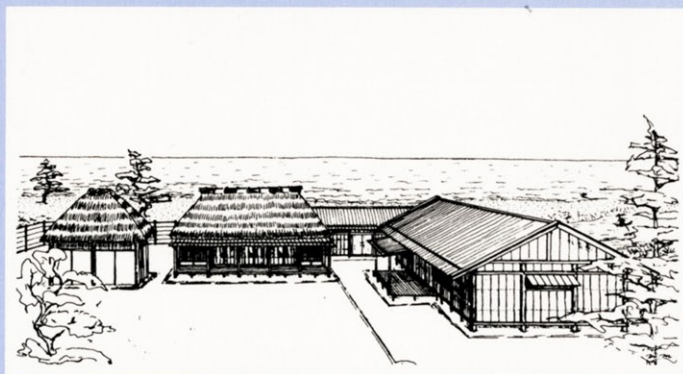
鎌倉時代前期に属する、掘立柱の建物は7棟以上発見されています。建物を取り囲むようにめぐっている溝も検出されています。出土した遺物は珠洲焼、土師質土器、中国製青磁、白磁などです。

中国製の青磁や白磁は、当時において一般の人々が所有できるとは考えられないため、かなりの地位の人々がここに居住していたと考えられます。

このころに東大寺領入善庄が成立しており、この建物や遺物を入善庄に関連づける説も出ています。

昭和56年及び58年の調査では、遺跡の北側で幅30メートルにおよぶ、旧河川跡が発見され、当時の自然景観や交通手段を推定するうえで有力な手掛かりとなりました。

これらの成果を受けて、じょうべのま遺跡は昭和54年5月14日に国指定の史跡となり、永久に保存されることになりました。さらに町では、多くの人々が活用できるように、指定地内を史跡公園として整備し、平成2年4月から一般に公開されています。



復元図

『富山県埋蔵文化財報告書Ⅲ』より転載
(1974年3月富山県教育委員会)



じょうべのま遺跡の発見年次ははっきりしませんが、遺跡の小字名に「道具沢」という名前があることなどから古くからその存在が知られていたと考えられます。また、地元では、この地区を支配した沢田の殿様の館跡であるという伝承があります。「じょうべのま」という名前は、過去の土地所有者あるいは、小作者の「ジロウベエ」の間がなまったものとか、東大寺領丈部庄の読みが転化されたものなどの諸説があります。また、「ま」という言葉には、北陸地方では海岸の船着き場という意味があり、公園内中央の旧河川跡から日本海へと出航していた様子が想像されます。冬の強烈な寄りまわり波によって、ここ数十年で海岸線は数十メートルも浸食されてしまい、当時の様子を伺い知ることはできませんが、目を閉じ、耳を研ぎ澄ませてみて下さい。波音の中から遙かな時代の人々の生命の息吹が聞こえてくるかもしれません。



墨書土器

本遺跡から最も多く出土したのは、土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの土器類で、この中で重要なものは墨書土器です。「西庄」「寺」「田中」などと書かれたものがあり、このことからこの遺跡が寺に関係のある荘所（荘園の管理所）跡であるということが推定されます。



柱穴

遺構は、遺跡の範囲や規模、構造物の推定等に重要な意味を持ちます。本遺跡では、木造建築物の存在を示す多数の柱穴が見つかりました。柱穴の重なり具合により、遺跡中心部で5回以上の建て替えが行われたことがわかりました。本遺跡は相当長い期間存続したものと考えられます。

下駄



杉の木で作った右足用の下駄です。相当使い古されたものらしく、台の板目は年輪が浮きあがっています。鼻緒は穴に残った食物繊維から見て麻が用いられたようで、使用された場所は主として、床上のような平面と考えられます。

杯蓋硯と風字硯



墨書土器とともに須恵器杯を利用した「杯蓋硯」が多数見つかっています。また、その形が「風」という字に似ていることから「風字硯」とよばれる、全国でも数少ない硯が出土しました。

木簡

木製品も多数出土していますが、この中で何と言っても最重要資料は「木簡」です。木簡とは墨書きされた木の札ですが、本遺跡で6点が発見されました。その中の1点が本遺跡の性格を決定する上で大きな決め手となりました。表は「丈部吉椎丸上白米五斗」、裏は「十月七日」と書かれています。丈部吉椎丸という人が白米五斗（当時の1俵）を上納したことを表す付札です。



いま、1000年の時を超え、貴重な出土物を手がかりに、はるかな時代へ空想の旅に出る。